

小舟 星野高等学校

助手席を倒し春三日月に雲
子を宿す猫の波打つ腹と寝る
ひらがなの羅列の春の光めく
かさぶたを剥がして雨のねぢあやめ
五日目の日記を開き雛あられ
消火器に無数のへこみ啄木忌
細き手に揚羽の時を奪はせり
母の日の空と水たまりを踏みぬ
参考書きつく束ねて五月晴
負け終へて掬ぶ泉を揺らすこゑ
教会にひらくオリーブ風を待つ
どの嘘も甘やかなりて海開き
降る光飛魚の背の深さまで
長き夜や瓶に小舟を育みぬ
ケチャップを振り下ろすたび秋思かな
竜胆の湧き立つ墓に名の太し
野分雲パスタの鍋を嘔きこぼす
秋蒔の人差し指の長くあり
こんにやくを手綱に結び律の風
神渡しカップ麺食ふまでの歌
綿虫や仮設トイレのドアかたし
紙漉の匂ひ喻ふるために嗅ぐ
三寒四温夜を待つ体温
枯野道はちみつ飴の溶けてゆく
冬の梅ほころぶ街よ幾星霜